

日本旧石器時代遺跡の「環状ブロック群」

—よりよい研究に向けた問題点の整理—

阿部ゼミ4年 五十嵐辰博

【研究目的】

日本の旧石器時代研究においては石製遺物が主な研究材料となっている。石器制作技術の復元を通して個人にせまろうとする研究がある一方、技術以外の面から集団の規模や生活領域といったものを復元しようとする研究もある。しかし石器を中心とした限られた遺物から集団にせまることは難しく、そのような研究には多くの問題を含んでいるのが実情である。本研究では、そのような集団にせまる研究のひとつとして挙げられる環状ブロック群をめぐる議論を取り上げる。やはりそこには、議論全体として少なからず問題点が含まれていた。その問題点を整理したうえで、具体的な環状ブロック群について再検討を試みる。この過程を通じて、石製遺物に頼る日本の旧石器時代研究の問題点を冷静にとらえつつ、どのような研究方法が有効なのかをつきつめていきたい。

目次

はじめに

- I. 日本旧石器時代研究の流れ
 - (1) 日本旧石器時代研究の流れ
 - (2) 環状ブロック群の発見
- II. 環状ブロック群をめぐる議論
 - (1) 環状ブロック群とは
 - (2) 環状ブロック群をめぐる議論の概略
 - (3) 環状ブロック群研究の整理
 - (4) 環状ブロック群研究の批判的検討
- III. よりよい研究に向けた視点
 - (1) 下触牛伏遺跡における石器接合資料の再検討
 - (2) 下触牛伏遺跡に対する諸論考の検討
- IV. 考察
 - (1) 問題点と議論の現状
 - (2) 日本旧石器時代研究への位置づけ
- V. まとめ
 - (1) 結論
 - (2) 課題と展望

おわりに

結論

議論が含む問題点の整理

- ① 分布状態のくくり方が見ために頼り恣意的になりやすい
- ② 遺物相互の同時性について十分な検討がなされていない
- ③ 行き過ぎた解釈・推測の域を出ない解釈がある
- ④ 用語や概念に関して、十分な吟味を要する
- ⑤ 他の研究や主張に対する批判的な研究が少ない

代表例の具体的検討—下触牛伏遺跡—

- ・ 報告書のデータそのものに誤りが多い
- ・ 剥離と「折れ」は分けて考える必要がある
- ・ 長距離間の接合資料は、必ずしも環状ブロック群全体の同時性の証拠とはならない
- ・ 石器集中の理解の相違は、根拠とする分析手法の違いによるものであると考えられる
- ・ 資料から明らかになる事実と、それ以上の推測の部分との線引きを行い、推測の部分に関しては慎重に議論をしていく必要がある

日本旧石器時代研究を進めていくうえで重要なこと

- ・ このような課題を改めて認識すること
- ・ 遺跡調査の方法を適切に選択すること
- ・ 事実と推測の線引きを行い、遺跡の解釈はあくまで「蓋然性の高いもの」というレベルにとどめておくべきであること

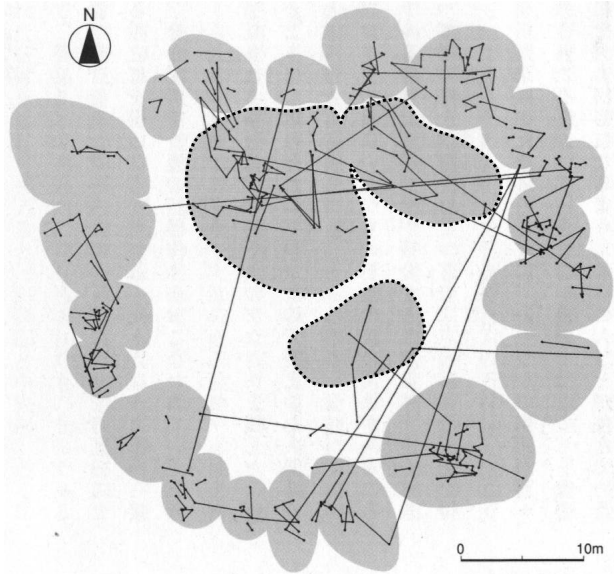


図1 ブロック間接合図 (小菅 2006)

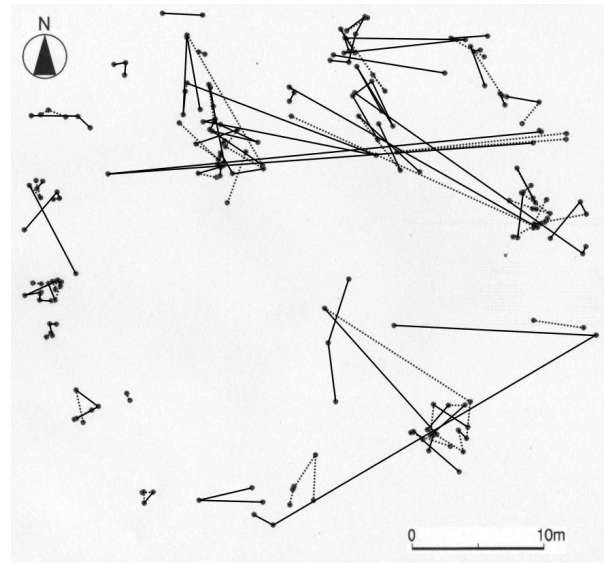


図2 作成した接合図
実線=剥離 破線=それ以外(「折れ」など)

表1. 研究者ごとの論考の相違

研究者	石器集中の理解	根拠	集団
大工原豊(1990)	4つの大ブロック群	隣接ブロック間の接合関係	4つの単位集団
須藤隆司(1991)	四、五カ所程度のユニット	隣接ブロック間の接合関係	ユニット=単位集団
栗島義明(1991)	六箇所前後の単位	個別別資料分布	単位=「世帯」
中島・軽部(1993)	南北2群	石器組成	(直接の言及なし)
稲田孝司(2001)	北東と南西に2分	石器器種・石材分布	単一集団
津島秀章(2007)	北東と南西に2分	石器原産地分析	2つの単位集団

主要参考文献

稲田孝司 2001 『先史日本を復元するー1 遊動する旧石器人』 岩波書店
 稲田孝司 2006 「環状ブロック群と後期旧石器時代前半期の集団関係」『旧石器研究』2, pp.55-68 日本旧石器学会
 岩崎恭一他 1986 『下触牛伏遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会 1993 『「環状ブロック群」ー岩宿時代の集落の実像にせまるー 資料集』
 笠懸野岩宿文化資料館 2005 『「環状ブロック群」ー3万年前の巨大集落を追うー 展示図録』
 栗島義明 1991 「人と社会」『石器文化研究』3 pp.231~241 石器文化研究会
 小菅将夫 2000 「環状ブロック群の構造」『考古学ジャーナル』465 pp.25~28 ニューサイエンス社
 小菅将夫 2006 『赤城山麓の三万年前のムラ・下触牛伏遺跡』 新泉社
 鈴木次郎他 1984 『栗原中丸遺跡』 神奈川県埋蔵文化財センター
 鈴木忠司 1980 「ブロックとユニット」『寺谷遺跡発掘調査報告書』 平安博物館
 須藤隆司 1991 「先土器時代集落の成り立ち」『信濃』43-4 pp.1~24 信濃史学会
 大工原豊 1990 「A T 下位の石器群の遺跡構造分析に関する一試論(1)ー群馬県下のA T 下位石器群の遺跡のあり方を中心としてー」『旧石器考古学』41 pp.19~44 旧石器文化談話会
 津島秀章 1999 「石器石材と遺跡構造ー石器石材から見る環状ブロック群の構造ー」『研究紀要』17, pp.1-12 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 津島秀章 2007 「二立散石ー石器原産地分析からみた環状ブロック群の構造ー」『研究紀要』25, pp.1-14 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 中島誠・軽部達也 1993 「下触牛伏遺跡とその分析」『「環状ブロック群」ー岩宿時代の集落の実像にせまるー 資料集』 pp.6~14 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会
 日本旧石器学会 2005 『日本旧石器学会第3回講演・研究発表シンポジウム予稿集 環状集落ーその機能と展開をめぐる』
 日本旧石器学会 2006 『旧石器研究』2
 橋本勝雄 1987 「旧石器時代ー1986年の動向ー」『考古学ジャーナル』277 pp.5~28 ニューサイエンス社
 橋本勝雄 1989 「A T 降灰以前における特殊な遺物分布の様相ーいわゆる「環状ユニット」について(その1)ー」『考古学ジャーナル』309 pp.25~32 ニューサイエンス社